関西書店新春寄稿

！本の力、書店の魅力

地域密着、個性的な店づくりで活路

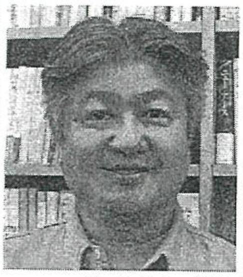
兵庫県伊丹市、JR伊丹駅前でブックランドフレンズを営む店主の河田秀人さん。子どもの頃の夢は「喫茶店か、めし屋をやりたい」と思い描いていた。敷居の高い店ではなく、カウンター越しにお客さんと会話できる和気あいあいの店。本屋さんになったが、店内には大きなテーブルと椅子を設置し、訪れた人と本の話のみならず楽しく語り合っている。河田さんは「夢は叶っている」とほほ笑む。

奈良市、近鉄高の原駅前、地元の人たちが集う商業施設「サンタウンプラザすずらん館」でたつみ書店を経営する辰巳信篤社長。自店の経営もさることながら、業界の行く末を案じ、子どもたちは将来、本が手に入りづらくなるのではと憂う。阪奈トーハン会では副会長を務めるなど書店仲間を牽引し、各店が長く商売を続けていけるよう奮闘している。

京都市下京区で80年以上の業歴を持つ大喜書店。一般的な町の書店から「建築、アートの専門店」という独自色溢れる店を経て、昨年、セレクトショップとしてリニューアルオープン。10坪の広さながら「建築家のための本屋さん」をコンセプトにベストセラー、流行に流されず、ディープな客層をつかんでいる。

ネット書店や大型書店の影響を受け、厳しい環境ながらも地域密着や個性的な店づくりで活路を見出そうと、懸命に営業を続ける町の本屋さん3人に新春の寄稿をお願いした。

読書の魅力伝えて 読書人口増やしたい


独自の選書をしっかり売り切る河田店主

ブックランドフレンズ（兵庫県伊丹市）　河田　秀人

世の中には、「本を読むひと」と「本を読まないひと」の二通りの人間がいる。後者にとって本屋は必要なく、また本を読むひとは大型店やネットで買うのが便利だとしたら、私のような小さな本屋に出番はない。しかし、実は本を読まないひとの中にも「読んでみたい」「読めるようになりたい」と思っているひとは多く、その人たちに「読書の明かりを灯す」のが私の仕事である。

本屋の仕事に就いて24年、自分の店を持って16年。初めのころは、売ることしか考えていなかった。売れる本をいかに早く、いかにたくさん仕入れるかが仕事だったが、後で苦労することになる。1996年の出版界売り上げのピーク以降、坂道を転げ落ちるように売上げを落とすしかなかった。そんな目に遭って、改めて「何のために本屋をしているのか」を考えた。街の小さな本屋ならではの役割とは…。

長く迷路をさまよったが、「自分は本を読まなかった人間だったのに、今では本の虜になっていること」、「ピンチのときはいつも本に救われたこと」などから、世の中に読書の明かりを灯すことを仕事にしようと思い始めた。

「思うは招く」とはその通りで、「読書の魅力を広めたい」「読書人口を増やしたい」などを口にすると、同じ想いを持ったひとが集まるようになった。その人たちは、本を読む習慣があり、読むだけでなく実践し、さらに本で人生が変わったという体験を持っている。次は「誰かに読書の素晴らしさを伝えたい」、「本の魅力でみんなを喜ばせたい、応援したい」、そんな想いが人を繋いだ。

入店しやすい雰囲気の外観

2015年、喜多川泰著『書斎の鍵』（現代書林）が発行され、さらに拍車がかかった。この本には読書の魅力が存分に描かれている。本好きの心を掴み、すぐに普及しようということになった。その延長で17年4月1日、ブックルネッサンス会議が始動した。ブックルネッサンスとは、「本には人生を変える力がある。本によって磨かれ、大器を創る。その体験をした人たちでチームを創り、読書の魅力を周りに伝え、読書人口を増やす運動のこと。

ブックルネッサンスを実現することで、みんなの心に明かりを灯し、幸福度を高める」活動である。本を薦めるうえで大切なのは、「何を薦めるか」ではなく「誰が薦めるか」ということだ。人に本を薦める以上に、まずは自分が成長し、人間的魅力を向上させなければならない。

おもしろいもので、世の中には自分は本を読まなくても他人には読ませたい、子どもには読ませたいというひとが多く存在する。本を読んでいなくても「読んだほうがいい」ことは誰でも知っているらしい。疑問は残るが巻き込むしかなかった。本を読まない子を持つお父さんお母さんと二人三脚で、誰でも読める本を探し、「読書の入り口」をつくった。私や業界の人間があらたまって読書の魅力を語らなくてもよいのかもしれない。言えば言うほど、かえって敷居を高くすることになりかねない。

見渡せば、そこら中で読書会やビブリオバトルが開催されている。ブログやSNSでは毎日のように誰かが本のことをつぶやいている。学校では朝読の時間が設けられている。

「本を読もう」は世界の合言葉。今日もどこかで、読書の明かりが灯されている。

案外、本屋は追い風の中にいるのではないだろうか。

子どもたちの未来のため 本屋を続けよう

新年あけましておめでとうございます。

２０１９年、10月には消費税が10%に引き上げられる予定ですが、業界はどのような影響を受けるでしょうか。もしかすると、消費税が上がるときに「もう、やっていられない！」と、出版社や書店を廃業してしまう

界は、書店にとっても出版社にとっても、これまで以上に厳しい年になりそうです。

私の周囲をみても、どんどん書店が減っていきます。CDやカセットを売

一番気になっているのは、子どもたちに本を買ってもらえなくなることです。大人はネットで購入したり、電車や車で書店のある大きな都市に行って買うことができます（それも大変ですが）。しかし、このような状況が続くと大変なことになります。これまでは子どもたちの身近なところに本屋があって、お小遣いを貰って『コロコロコ

なくなってしまいます。図書館には『コロコロコミック』は置いていません。『ちゃお』も『りぼん』も『なかよし』も貸してくれません。本に親しむ機会が減り、子どもたちはどんどん本屋から離れていきます。また、最近店頭で子どもが「お母さん、僕、これ借りたい！」、お母さんが「ここは本を借りるところじゃないのよ。買うところなの」と

2019．1．7